



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 1 月 5 日(水)

発行 館長 加藤 智 一

線香花火

コロナ禍以降、夏の一時、花火で盛り上がることもなくなり、ましてや地味な「線香花火」に注目することもなかったのですが、秋も深まり、あの酷暑でさえ懐かしい季節をむかえると、なぜか恋しくなった「線香花火」。というわけで、今回は「線香花火」の科学です。

実は「線香花火」の燃え方は四段階あり、それぞれの段階で名前がついているのです。それは順番に、「蕾」「牡丹」「松葉」「散り菊」といいます。それぞれが花の姿や人生の儚さを象徴しており、江戸時代に誕生した「線香花火」は、素材や鑑賞方法の違いから東西で異なる形状を持ち、繊細な火花の変化に日本人の美意識が込められています。

(1)「線香花火」の四段階とその意味

「線香花火」は、火を灯してから消えるまでの短い時間に、まるで一輪の花が咲いて散るような変化を見せます。その燃え方には、以下のような名前が付けられています。



① 蕾 (つぼみ)

点火直後、火薬がじわじわと熱されて火の玉が形成される段階です。まだ火花は飛ばず、静かに命が芽吹くような様子から「蕾」と呼ばれます。

② 牡丹 (ぼたん)

火の玉が安定し、パチパチと力強い火花が飛び始める段階。華やかに咲き始める様子が牡丹の花に似ていることから名付けられました。

③ 松葉 (まつば)

火花が四方に勢いよく飛び散る最盛期。細く長い火花が松の葉のように見えることから「松葉」と呼ばれます。「線香花火」の生命が最も輝く瞬間です。

④ 散り菊 (ちりぎく)

火花の勢いが徐々に衰え、一本一本と落ちていく様子が、菊の花びらが散るように見えることから名付けられました。火の玉は色を変え、静かに消えていきます。

この四段階は、単なる物理的現象の名称ではなく、

花の姿や人生の移ろいを重ねた日本的な感性の表現です。短くも美しい命の流れを見つめることで、「線香花火」は鑑賞する者に深い余韻を残します。

(2)「線香花火」の歴史と製造の背景



「線香花火」の起源は、江戸時代前期の寛文年間(1661~1673年)にさかのぼります。打ち上げ花火が庶民の娯楽として広まる中、子ども向けの玩具花火として開発された

のが始まりです。当初は「すぼ手牡丹」と呼ばれる形状で、稲藁の先に黒色火薬を塗り、香炉の灰に立てて鑑賞するというものでした。これが「線香」のように見えたことから「線香花火」と呼ばれるようになったとされます。やがて江戸に広まると、藁が手に入りやすかったため、代わりに和紙を使った「長手牡丹」が登場します。これが現在主流の形で、こよりの先に火薬を包み、斜め下に向けて持つスタイルです。関西では今も「すぼ手牡丹」が親しまれており、東西で異なる形状と鑑賞方法が残っています。また、火薬には、硝石・硫黄・炭素を主成分とする黒色火薬が使われ、炭素源には松煙や麻炭が用いられてきました。松煙は松の切り株を燃やして得られる煤で、火花の色や質感に影響を与える重要な素材です。近年は入手が難しく、代用品が使われることもあるそうです。

(3)「線香花火」に込められた美意識

「線香花火」は、派手さよりも静けさと儚さを重んじる日本人の美意識を象徴する花火です。その短い命の中に、誕生・成長・最盛・衰退という人生の縮図が込められており、そこに自らの感情や記憶を重ねる方も多いのではないのでしょうか。また、「線香花火」は「一時的な人気」や「儚い恋」の比喻としても使われ、文学や歌にもたびたび登場します。火花が散る瞬間の美しさと、すぐに消えてしまう切なさ、多くの人の心を捉えてきたと言っても過言ではないでしょう。